

新・農・業・人

この人この経営

山田牧場

山田 修さん、葵さん
おさむ あおい

非農家から志し10年。夫婦二人の放牧酪農
牧場従業員として働き、資金と腕を磨く
牛にも人にも優しい酪農経営をしたい



山田牧場

所在地 ● 広島県三次市

就農年 ● 2020年4月

事業内容 ● 放牧酪農

経営規模 ● 経産牛26頭（ホルスタイン種）

育成牛6頭（ホルスタイン種5頭、ブラウンスイス種1頭）



P19上：山田修さんと葵さん夫妻。5月下旬には第一子が誕生予定だ。下：心に余裕を持って気分よく働けるのが放牧酪農の良いところ」と話す山田さん。P20：放牧地を区切り常に新鮮な牧草を食べさせる集約放牧で乳量も安定。P21：牧草の上でくつろぐ牛たち。放牧中は山田夫妻ものんびり過ごす。



牧草を食む牛に魅せられて

牛にも人にも優しい酪農経営をしたい――。

山田修さん（36歳）は、広島県ではほとんど前例がないホルスタイン種の放牧酪農を実践する気鋭の酪農家だ。非農家の出身から、就農を志し、10年間の研鑽を経て、2020年4月に第三者継承で就農を果たした。

山田牧場は、JR広島駅から車で北東に約2時間、標高約400mの中山間地にある。面積は放牧地を含め約6ha。50頭の牛舎で32頭を妻の葵さん（26歳）と2人で飼う。

4～11月に4haの放牧地で放牧する。電気牧柵を使って牧地を5区画に分け、1日ごとに区画を移動させる。「集約放牧」と呼ばれる方法で、新鮮で栄養価が高い牧草を集約的に食べさせることで、一頭当たりの搾乳量を増やしている。

春は日中、夏は夜間に放牧する。冬は牧草の養生のため放牧せず、牛舎近くの約50m²の運動場に放し日光浴をさせる。牧草はオーチャードグラスなど5種をまき、根付きやすさを検証する。

山田さんは、放牧の利点として、牧草で飼料費を抑えられることと、

牛が健康で長生きし後継牛の購入や育成の費用が少ないことを挙げる。乳牛は一般に3、4産で搾乳牛の役割を終えることが多いなかで、7産までと長命連産をめざしている。

牛舎につきなご濃厚飼料で乳量を高める飼育では、一日中、牛につきつきりで細かな餌管理が必要になる。一方、山田牧場では、午前4時半～9時に搾乳や餌やり、掃除をし、終えたら午後4時まで休憩する。「ゆつくり生活したい自分に合っている」と説明する。

山田さんが就農を志した原点は、高校受験を控えた中学3年生のとき、見るともなく眺めていたテレビで、放牧された乳牛を見たことだった。緑の牧草を無心で食む牛の姿に心を引かれ「自分で牧場を持って牛を飼いたい」と夢を抱いた。翌日、中学校にあった西条農業高校（東広島市）の学校案内を見て進学を決めた。

高校の畜産科で酪農を学び、実習で牛の世話を楽しむ自分の心を確かめた。それまで農業に縁はなく、特別に動物が好きでも、乳製品が好きだったわけでもなかった山田さん。「正直、なぜ牛が好きなのかはよくわからないが、牛が草の

上でくつろいでいる姿を見ると心が落ち着く」と笑う。

卒業後は県の農業技術大学校に行くつもりだったが「自分の牧場をつくりたいなら経営を学びなさい」と担任に勧められ、北海道江別市の酪農学園大学に進んだ。大学では、集約放牧による経営論のゼミを選んだ。放牧酪農での新規就農に目標を定め、放牧酪農を推進する北海道足寄町の酪農家の下で1年間技術を学んだ。

「就農するなら、地元で」と24歳で帰郷。県北部の牧場で従業員として働きながら、就農に向けた準備を始めたが、すぐに壁にぶつかった。放牧に適したまとまった空き農地が見つからなかったのだ。

就農への長い道のり

県内で放牧酪農を実践するのはわずか3戸。臭いや衛生面を懸念する声が多く、体格が大きいホルスタイン種の放牧には、脱柵のリスクも指摘された。また、放牧牛は乳量が少ないイメージがあり、「放牧で新規就農なんて無理だよ」と言われたこともたびたびあった。

それでも諦めず、広島県酪農業協同組合（広酪）や行政に相談し、

就農への道を探った。「まずは技術を学び、自己資金を準備するべき」と助言を受け、県内各地の牧場で従業員として働き、腕を磨いた。広酪や行政と経営計画を練り、経営者としての勉強を重ね、県内でブラウンスイス種の放牧酪農をする先輩酪農家との交流を深めた。

帰郷から5年、20代の終わりに差し掛かり、初めて焦りを感じた。農地は見つからず、自己資金も貯まらない。「このまま自分の牧場を持てないのではないか」と不安になった。弱気を払うため、一つの覚悟を決めた。「3年間で500万円を貯められなければ、夢を諦める」。がむしゃらに仕事に打ち込み、目標を達成。決意を新たにしました。

各地の牧場で働くうち、山田さんの就農を応援する人が増えた。2017年、従業員として働いた株式会社広島牧場の元同僚から「閉鎖していた甲奴分場を再開するため場長を探している」と知らせを受けた。山田さんはすぐに同社を訪ね、「放牧をやらせてほしい」と頼み込み、許可を得た。

4畝の草を刈り、1年かけて放牧地を整えながら、搾乳、出荷、未經産牛の出産などを一人でこなした。「これまで多くの牧場で身に付

けた技術があったから乗り切れた」と振り返る。この頃に葵さんと出会い、交際を開始。心の支えを得たことも大きかった。

乳量が安定し、放牧で経営できる確信を得て独立への想いが高まった。広島牧場と交渉し、甲奴分場と牛を買い取って就農できないか、金額など条件を話し合った。広酪や行政などの後押しもあり、継承が実現し、20年4月に新規就農。帰郷から10年が過ぎていた。

翌5月に結婚。「長くかかったが、どの経験も必要なことです。新規就農には地域で助けてくれる人が欠かせない。応援してくれた多くの人、機会をくれた広島牧場に感謝は尽きない」と想いを述べる。

初年の4〜12月は生乳約190トを出荷し、約2500万円を売り上げた。1日1頭当たり乳量は29キログラムと、県平均の26キログラムを上回った。「幸いに乳房炎などの病気もなく計画以上の成績だった。牛の健康に気を配り、放牧酪農の経営モデルを示したい」と意欲を見せる。将来は近隣の山林を開拓して放牧地10畝、搾乳牛30頭に規模拡大をめざす。

（文）日本農業新聞 鈴木 健太郎
撮影／河野 千年

